



## 節句人形の

# 『素朴なギモン』コーナー

Vol. 81

## 陣羽織

端午の節句の際、五月人形や五月飾りとともに陣羽織を着用した主役の男児が写真に収まる姿を見かけます。子どもが着られるよう、小さな体に合わせて作られています。煌びやかな生地が使われることが多く、見た目は豪華です。端午の節句を盛り上げる節句用品の一つである陣羽織について調べてみました。

ものが使われていたが、戦の際、自由が利かないために取り除かれたという。陣羽織には裏地がついた裕あむせと、裏地のない単ひとへがある。夏用の単は紗で作られることが多く、裕は主に輸入品である蜀江錦しやうかうしきや、ピロード、羅紗、更紗などの生地を用いて作られた。

南蛮文化の影響を受けた斬新なデザインが多く誕生

陣羽織のデザインは、南蛮文化の影響を色濃く受けていると言われている。とりわけ戦国時代、桃山時代に着用された陣羽織はユニークなデザインが多いとされている。デザインの特徴はまず大胆であること。全体的なシルエットはマントのように裾が広がった形をしていて、紋

陣羽織は、鎧の上に着用する羽織ものである。主に室町時代末期から江戸時代の終わりまで武士たちが着用していた。現在でいう、ベストのような形状をしていて袖のないものが一般的。古くは陣中において袖のついた

や図柄がはみ出そうなほど大きく描かれている。多くの図柄は、切り詰めや刺繍などの高度な技を用いて描かれている。細部にもこだわりを見せる。この頃には、背広のような襟のデザインをあしらったものや立襟が登場。ボタンを使用したものも増えた。デザインばかりでなく、戦で使うために考慮された部分もある。裾には革を用い強度を高めた。また背後には動きやすさを出すためにスリットのような切り込みが入っているものも多くある。さらに、乗馬したときに陣羽織がヒラヒラと舞うことがないように鞋くは(爪型の留め具)を付けるなど、実用的な工夫を凝らしている。戦が頻発した乱世において、実用性のある陣羽織は戦国武将にとって必要不可欠な存在だった



端午の節句で着用する陣羽織

たに違いない。オリジナルのデザインでお洒落をし、自己表現を楽しんだことだろう。江戸時代には歌舞伎や浮世絵などの影響もあり、庶民の間でも陣羽織は武士らしい装いの一つとして親しまれていた。そのため、五月飾りの甲冑や武者人形とともに飾るミニチュアの陣羽織があった。現在では五月飾りを購入した客に、幼児が実際に着用できるサイズの陣羽織を、販売店がサービス品として付けることが多い。それらは衣桁に掛けて飾るだけでなく、節句の祝い着として着用し、記念撮影に臨む際にも活用されている。